

俳句：文苑

著者	龜水，柳浦，雲涯，草江，旭洲，落葉，蘭谿，寅彦，千江，紫川，まさこ
雑誌名	龍南會雜誌
巻	7 3
ページ	7 7 - 7 9
発行年	1899-06-27
URL	http://hdl.handle.net/2298/5354

園亭三兩客。團坐座無靈。唯談時入玄。忽爾我忘吾。
綠陰重疊翠雲凝。不識人間有暑蒸。膝榻移來奇夢熟。一蓬涼雨坐如氷。

客中春盡

客中春已盡。遊子未歸家。一夜半窓雨。蕭々送落花。

俳句

行く春を寐ころふ宿の二階哉
ねばろ夜の小姓をつれぬ深見笠
曲江や微風に蝶のあわたゝ
寫生する頭の上の雲雀かな
悉く沙干に出でゑ浦屋哉
岸近く魚跳ふ湖のねばろ哉
金鞍や鬣を吹く春の風
春風や賽錢多き薬師堂
壇那寺の椽より見るや麥の秋
夕やけの日にゝするや麥の秋
笹舟の流れよりけり杜若

紫溟吟社運座俳句

浮世繪や日傘さゑたる京の人
日傘さゑて琉球人の通りけり

雲柳

涯浦

龜

水

芝

峯

鹿の子や短き角の生えにけり
 晝すぎや水鷄追ひ出す堤の下
 鮎鮎を漬けて河伯を祭りけり
 澁色の日傘たゝむや寺の門
 徒に夏草延んで雨多き
 帆柱に蝙蝠飛ぶや夕月夜
 小さき蚊の血を吸ひすぎて動かざる
 名物の鮎食ひて越えぬ國境
 山門の薨きらめく茂かな
 一列に鮎をえ上る淺瀬かな
 雨なくて南畝の茄子花遅き
 灯ともえて芍薬を見る長者かな
 菅笠と夏帽と行く廣野かな
 日傘えて琉球人の妻ならん
 蚤取粉と線香とを賣る老婆かな
 貧しさの蚊屋の設けも候はず
 伴天連の墓を廻りて薔薇の花
 鮎釣の簀脱ぎ捨つる岩の鼻
 早鮎を饗する妻のしたり顔
 鳥飛んで庭の柘榴に傾く日
 風が吹く四條五條の幟かな

全 全 千 全 全 全 全 寅 全 全 全 蘭 全 全 全 薛 全 全 旭 全 草 全

花咲かで茄子大方枯れんとす
 蝙蝠は逃げてままひね長き竿
 とかくまてまた燃え上る蚊遣かな
 水鶏遠く我物思ふ夜なりけり
 荒畑や草にまじりて茄子の花
 柘榴や小鳥落さんはかりごと
 社の裏に四五匹遊ぶ鹿の子かな
 瀛車道の左右にせまる茂かな
 栗の花散るや夕の日のよわり
 鮮漬けて主客碁を打つ晝下り
 中門に柘榴咲いたる書院かな
 蝙蝠や質屋の庫の間より
 火申ふつて谷をたぎるや栗の花
 日落ちて幟下すや町はづれ
 紫陽花や蓼の這ひ出る庭の隅
 夏帽や釣竿長き湖の南

全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 紫 全 全 全

さ

こ

川